

## ルベン・ダリオと私

講師：渡邊 尚人（1980年卒、前バルセロナ総領事）



私は、1980年に東京外国語大学スペイン語科を卒業、外務省に入省し、以来40年の長きに亘り外務省で勤め上げ、これまで、米州、イベロアメリカを中心に勤務し、最後は在バルセロナ総領事として勤務しました。外大で、原先生他にスペイン語を教えて頂いたおかげで、外交の世界で日本を発信し、文学の世界を知り、ルベン・ダリオを知ることができ、人生が大いに豊かになったこと感謝しております。

二度在勤したニカラグアは、生活条件は厳しい国でしたが、素晴らしいお宝のある国で、私にとっては第二の故郷の様な国でした。ニカラグアは、実は20世紀の前半は、綿貿易で栄え中米一の繁栄を謳歌した国です。しかし、ソモサ軍事独裁政権、マナグア大地震、サンディニスタ革命、その後の中米紛争による内戦が続き、1990年のチャモロ大統領選出により民主化しました。国際社会や日本もニカラグアの人々と共に国作りに懸命に汗を流しました。日本・ニカラグア修好70周年記念として建設された日本庭園開所式には常陸宮同妃両殿下が出席され、今でも文化行事の行われる市民の憩いの場所となっております。

ある日、淡水サメで有名なニカラグア湖を訪ねました。色とりどりの遊覧ボートのある船着き場に着きますと向こうから小さな女の子がよってきました。おそらく8歳か9歳くらいで、陽に焼けた金色の髪と褐色の肌、大きな黒い目にぼろを着て、その上、裸足でした。彼女は、微笑みながら私の

方に近づいて来て、何かをしゃべり始めました。なにかリズムのあるしゃべり。そう、それは、詩でした。響きのある甘く、妙に切ない詩の朗読だったのです。

“マルガリータ、海は美しく、  
風はレモンのかすかな香りを運ぶよ。  
私は心の中で雲雀が鳴くのをを感じる。  
お前のアクセントさ。

マルガリータ、

お前にひとつお話をしてあげよう。”

この一節ではじまる詩です。

私はその朗読に身震いすら感じ、その詩と作者、ニカラグアの文学を調べていったのです。知れば知るほど、ニカラグアは詩の文化が日常生活に根付く、詩と詩人の国であることを発見しました。これは遙か昔からのものです。16世紀のニカラグアの名前の由来である先住民酋長ニカラオとスペイン人植民者ヒル・ゴンサレスの最初の出会いでニカラオが行った世界観、宇宙観、宗教観、死生観についての饒舌な質問は極めて詩的でした。長い詩の文化と伝統にはぐくまれ、ルベン・ダリオが生まれたのです。

ルベン・ダリオは1867年中米ニカラグ



ニカラグア湖

アの北部のメタパに生まれました。幼少の頃から神童で3歳にして読み書きをし、13歳の頃から新聞に掲載された詩により、少年詩人としての名声は中米に広まっています。失恋がもとで19歳で出国。以来多くの国の新聞社での活動の傍ら、21歳の時、代表作「青…」を出版。長年西欧諸国に暮らし、モデルニズムの天才詩人としての地位を不動のものとしてゆきます。なお彼は酔いどれボヘミアンの生活をも享受し、放浪性も兼ね備えていたようです。また、ダリオは、詩人、ジャーナリストの他にもスペイン駐在ニカラグア公使等外交官としても活躍しています。1916年49歳でレオンで永眠。遺骸は、レオンの大聖堂の地下に納棺されています。

ルベン・ダリオの作品は、リズム感のある多様な韻律や格により音響と視聴覚に訴える色と光の反射効果を持ち、礼拝用語、古語、新造語等の多用により絵画、彫刻、音楽世界が詩空間に表現されるのです。ダリオは、スペイン文学からの模倣を脱し、仏文学・言語の世界に接近することにより自立した独創的なイスパニア世界文学、近代文芸主義を構築したのです。ダリオのモデルニズムは、イスパニア世界の多くの作家達に大きな影響を与えています。

ルベン・ダリオは、作品の中で何度も日本にふれています。彼は、1900年のパリ万博にも特派員として参加し、ジャポニズムが流行したフランスから日本文化の多くのモチーフを彼の作品に取り込み、モデルニズムに合体させていたのです。

1904年発表された「新旧日本」では、開国により急速に変貌してゆく日本につき紹介し、古き良き日本の伝統を忘れ、西洋帝国主義、軍国主義の道をつき進む当時の近代日本を嘆き、声高に叫ぶ文明の勝利の後に

来るであろう日本の行く末について憂いています。

ルベン・ダリオは、詩人、ジャーナリスト、外交官という複合的な目で世界を見つめモデルニズムの旗手となり、旺盛な創造的活動を行ってきたのです。4月に文芸社より刊行されたルベン・ダリオ物語全集は、日本では未発表作品も含めて86作品が掲載されています。ダリオは、詩人としてはもちろん、散文家や物語作家としての才能を存分に発揮しております。特に吉本ばなな様よりは、「この高潔で美しく甘い味を持つ魂の大きな力に時代を超えて触れることができよかつたと思う」との帯文を頂きましたが、これは時代を超えたダリオ文学の重要性を惹起するものと思います。

文学は、人を見る目、世界を見る目を養ってくれ、本当に人生を豊かにしてくれるものです。また詩は、日常生活に埋没して忘れかけていた人間らしい美しい心や芸術への憧憬を再び取り戻させてくれるものです。

最後に、ウォールト・フイトマンの詩をスペイン語と日本語で、そして“マルガリータ・デバイレに捧ぐ”を日本語で朗読し、講演を締めくくりました。



『ルベン・ダリオ物語全集』（文芸社）

著：Ruben Dario / 訳：渡邊尚人

判型：四六並 / ページ数：484

定価：1,760円 / ISBN：978-4-286-22498-5